

【連続公開セミナー@立教大学】

岩波文庫から刊行中の吉川一義氏による

# 新訳で プルーストを 読破する

第3回「花咲く乙女たちのかげに I」

2018年2月17日 (土) 10:30-12:30

立教大学池袋キャンパス 5号館5401教室

ゲスト **石橋 正孝** 氏 (立教大学助教)

司会 **坂本 浩也** (立教大学教授)



主催 立教大学文学部文学科フランス文学専修  
問合せ先 学部事務1課 (03-3985-3392)  
[proust.rikkyo@gmail.com](mailto:proust.rikkyo@gmail.com)  
Twitter [@proust\\_rikkyo](https://twitter.com/proust_rikkyo)

申込不要・入場無料。定員75名 (先着順)。  
テキスト (プルースト作・吉川一義訳『失われた時を求めて』第3巻「花咲く乙女たちのかげに I」岩波文庫、2011年) を通読して、ご持参ください。





## 公開セミナー「新訳でブルーストを読破する」第3回 ゲスト講師インタビュー

石橋正孝 (いしばし・まさたか) 氏

——「吉川先生の『訳者あとがき』は情報提供者への丁寧な謝辞でしめくられるのが特徴です。第3巻では、貴重な図版の発見者として石橋さんの名前があげられています。作中で言及されている児童書シリーズの挿絵をどうやって突き止めたのか、その児童書の世界とブルーストの物語（「私」とジルベルトの初恋）がどう重なるのか、というお話はセミナー当日に詳しくかがうとして、はじめて読む参加者のために、石橋さん自身の初読時の印象と、その後のブルーストとの付き合いかたを教えてくださいませんか。」

石橋「高校の図書室の、入り口からすぐの棚にあった銀色の筑摩書房版ブルースト全集、あの装幀の角が硬くて重い本をカバンに入れて持ち歩いていました。ただし、第1巻と第2巻を繰り返し借りてはその中をぐるぐるとさ迷うに留まり、第3巻以降には進めませんでした。大学進学後、ちくま文庫に入った新訳も出るたびに買いましたが、「ゲルマンのほう」にたどり着いたところで息切れ。結局、全巻を「読了」したのは、それから10年以上も経って、6年に及んだフランス留学から帰国後、近所のフィットネスクラブに通いながら、フランス語の朗読CDを通して、でした。かれこれ20年以上かけたことになります……。初読時の印象は、内容も形式（何より「長さ」!）も何から何まで馴染みのない未知の世界に関わっており、その感触を、井上訳のあの異形の日本語が伝えていたせいで、そのまま丸ごと受け止めるしかないにもかかわらず、居心

地そのものは決して悪くはなかった。ブルーストとこれほどまでに持続的に、しかし緩やかに付き合うことになったのは、最初からその世界に迷い込んで出られなくなったからでしょう。」

——「石橋さんは、東大駒場で学んでパリ第8大学に留学し、ヴェルヌと編集者エツツェルの共同作業を綿密に検証されました。博士論文の日本語版『〈驚異の旅〉または出版をめぐる冒険——ジュール・ヴェルヌとピエール＝ジュール・エツツェル』（左右社、2013年）は、朝日新聞の書評で荒俣宏氏に絶賛され、鹿島茂氏からも「ヴェルヌ研究の『鬼』」と呼ばれています。評伝を翻訳するかたわら（フォルカー・デース『ジュール・ヴェルヌ伝』水声社、2014年）、日本ジュール・ヴェルヌ研究会の立ち上げにも尽力して会長をつとめ（2009-2016年）、現在はフランス本国にも存在しない原文の校訂をおこなう画期的な翻訳プロジェクト「ジュール・ヴェルヌ〈驚異の旅〉コレクション」を牽引されています。しかも先日は、『地球から月へ/月を回って/上も下もなく』（インスクリプト、2017年）の刊行後まもなく、「なぜシャーロック・ホームズは『永遠』なのか——コンテンツツーリズム論序説」により、第61回群像新人評論賞を受賞。専門は大衆文学研究といえそうですが、大西巨人論（『大西巨人——闘争する秘密』左右社、2010年）を発表したり、ヌーヴォー・ロマンを論じたり、ご自身で東大時代に小説を書いて入賞歴があったりもする（銀杏並木文学賞）。そんなふうに幅広く小説の歴史に親しんでいる石橋さんの目から見て、ブルーストはどのような存在でしょうか。」

石橋「ブルースト以後のあらゆる文学にとって、普段はことさら存在を意識することがなくても実際には常にそこにある背景、とでも言ったらよいでしょうか。

狂気と境を接するほど明晰に論理的かつ繊細に具体的であり、文学を意識的に思考しようと思えば、必ず参照せざるをえないし、いかなる対象を選ぼうともそこで論じようと思う問題が見出される一種の場なのだと思います。個別の作家としてのブルーストから直接に影響を受けた作家ではなく、むしろほとんど読んでいないと思われる作家にこそ、ブルースト的なものを感じてしまうのは、それゆえなのではないでしょうか。例えば、日本のブルーストは誰なのかといえば、それは『神聖喜劇』の大西巨人なのだと個人的には確信しています。」

——「第3巻の読者のために、具体的に注目してほしいポイント、読みどころを教えてください。」

石橋「細部に躓いて（?）道に迷いがちな（そしてそれが楽しい）『失われた時を求めて』ですが、実は、かっちりしたブロックが連なる構成の妙が、とりわけ何度か再読するうちに（記憶の助けで）浮かび上がってくるという音楽的な側面があって、第3巻はそれが初読時であっても比較的わかりやすく、ノルポワのパートとベルゴットのパートの対比や、後者を律儀に締めくくる落ちによって、深刻なテーマに「笑い」がもたらされています。こうした対比は、細部に至るまで張り巡らされていますが、抽象的とも思える芸術論にも印刷技術等への目配りがあるのが興味深く、証券と分冊刊行の挿絵版、娯家と図版入り絵画史の共通点への指摘は、まるで吉川訳の豊富な図版をあらかじめ正当化しているかのようです。」

（構成：坂本浩也）